

理想のリーダーを演じる

三井住友トラスト・ホールディングス会長
経団連都市・住宅政策委員長

おおくぼ てつお
大久保 哲夫



多くの方が経験されていると思うが、社長に就任して以降、「座右の書は何か」と尋ねられることがよくある。元来あまり読書家ではないこともあり、数多ある古今の名著からこれぞというものを選ぶことはできないが、出口治明氏による「座右の書『貞観政要』」は、私にとって数少ない道しるべとなる書籍である。

ご承知の通り、「貞観政要」は唐の第2代皇帝、李世民(太宗)の言行録であり、リーダーにとつての貴重な戒め、アドバイスが数多く記されている。これを素材とした経営書、リーダー論も数多く上梓されているが、その1冊である同書で、出口治明氏は、自身の体験談を交えながら、独自の解釈・解説を開陳されている。その中に、今から7年ほど前、社長就任早々の私

が自分の社長像を描くにあたり、非常に心に響き、わが意を得たりと感じた一文があった。それは「理想のリーダーを演じる」「理想を『演じ続けた人』は、やがて本物になる」という言葉である。「演じる」ということにマイナスのイメージ、少し軽薄な印象を抱く方もいるかもしれない。しかしながら、その意味するところは、自分が組織の中で新たにより責任の大きな役割に就く時には、まず自分の現在の立ち位置と新た

な役割のあるべき姿、ありたい理想の姿のギャップを認識し、その理想に向けて必死に「演じる」、もしくはその理想に近いモデルになる人がいれば一生懸命「まねる」ことを日々実践することで、知らないうちに自分の真の実力もその理想に近づいていく、ということである。これまでの40年以上の長い会社員生活を振り返ると、部長や役員そして社長になるといふ道の中で、結局これを繰り返してきたという思いが私自身にもある。また自分の後輩や部下にも、折に触れてこのようなアドバイスをしてきた。もし、今、新たに大きな責任や役割を前にして不安で足がすくんでいる人や、逆に今までの自分を変えずに自然体で何とか乗り切れると思っている人が周りにいたら、私は迷わずこの言葉を贈りたいと思う。



『座右の書『貞観政要』中国古典に学ぶ
『世界最高のリーダー論』出口 治明
KADOKAWA / 角川新書